

「政治的に中立でいたい」時代の「政治的なもの」

—マンハイム・シュミット・丸山—

野口 雅弘

成蹊大学法学部教授

政治に関心はあるが党派的なものは嫌い

先日NHKの番組で、若者と政治についての特集が放映されていた。そのなかで、若者の政治参加を呼びかける団体の学生が「自分たちの活動が政治的に“中立”でないと捉えられると、グループに賛同してくれる人が離れてしまう」(NHKおはよう日本 2020)と語っていた。政治参加を呼びかけながら、意見が割れるテーマに関わることは回避したいというのは、ずいぶん矛盾しているようにも見える。しかし、今大学で学生と話していれば、このような発言に接することは珍しくない。「右でも左でもなく」「政府を批判するわけではなくて」「私はフラットです」「できるだけ中立的な立場で政策を論じたい」など、「政治的に中立に」政治と付き合おうとする傾向が強くみられる。

「政治的に中立でいたい」というのは、いわゆる「政治的無関心」とは異なる。選挙に行かない、支

持政党を聞かれて「まだ決めていない」と答える、あるいは親密な空間ですら自分の政治的な立場性を表明しないなどは、政治的無関心という枠組みで論じられることが多い。しかし、政治的な問題にそれなりに関心を持ち、時事的なテーマについて一定の知識と見識を持ち、したがって政治についてかなり「意識が高い」にもかかわらず、党派性や特定の政党へのコミットメントを避けようとする人は、特に若い世代で少なくない。たとえば、「#検察庁法改正案に抗議します」という投稿をリツイートするかどうかで迷い、たくさんの情報を集めて読んで考えた末にそうしなかった人については、「アパシー」とはいえない。

実際、コロナ禍のなかで、学生は政治的に無関心ではいられなくなっている。オンラインのゼミで、PCの画面越しで交わされる学生たちの発言からも、それはわかる。ますます深刻になる学費の負担にしても、コロナ感染者の増大が危険な水準になっているのにもかかわらず継続されるGoToキャンペーンについても、あるいは原発再稼働の動きについても、彼らは決して無関心ではない。バブル期の学生が政治について無関心でいることが許されていたように、今の学生は無関心ではいられない。自分の将来についても、この社会の未来についても、切迫したところで彼らは生きている。

若者ほど「支持政党なし」が増える傾向がある。しかしこれは無関心とも、意識が低いとも、保守化とも異なる。政治的な問題に関心は持っているが、

のぐち まさひろ

早稲田大学大学院政治学研究科博士課程単位取得退学。哲学博士(ボン大学)。専門は政治学・政治思想史。早稲田大学政治経済学術院助教、岐阜大学教育学部准教授、立命館大学法学部教授などを経て、2017年より現職。著書に『闘争と文化—マックス・ウェーバーの文化社会学と政治理論』(みすず書房、2006年)、『付度と官僚制の政治学』(青土社、2018年)、『マックス・ウェーバー—近代と格闘した思想家』(中公新書、2020年)など。

党派的なものがイヤなのだ(野口 2018a)。フォーカスすべきは、この気持ちと思想である。

他者を他在において理解する

丸山眞男の『自己内対話』には、次のような一節がある。「学問的自由の前提は、マンハイムによれば、「いかなる他の集団、いかなる他の人間をも、その他在において把握しようとする根本的な好奇心」にある。(Carl Schmitt, Ex Captivitate Salus, S. 13) (丸山 1998: 57)。正確な日付は付けられていないが、丸山がこれを書いたのはおそらく1960年である¹。

カール・マンハイムは1945年にロンドンからドイツに向けてラジオ放送を行った。この放送原稿は占領情報局の冊子Neue Ausleseに掲載され、カール・シュミットはその中の一節を『獄中記』(Ex Captivitate Salus)で引用した。丸山はシュミットの本から、この部分を抜き出した。経緯は相当にややこしい²。そして実際、マンハイム、シュミット、そして丸山へと文章が引き継がれていくごとに微妙に表現が変わり、意味も変化していく(清水 2019: 第4章)。

それでも、丸山はこの一節がとても気に入っていたようだ。慶應大学の内山秀夫研究会(1979年10月)でも、彼はこの一節を引用して、「「ナチズムに決定的に欠けていたのは、そうした知的好奇心である」とマンハイムが言っていることです。他者を他者として理解する〔ここでは「他者として」になっている—野口〕ということ、これが学問的認識のアルファです」(丸山 1996b: 172)と述べている。またみすず書房の編集者メモ(1985年10月4日)にも、この一節への言及が出てくる(小尾 2019: 253)。

晩年の丸山はオウム真理教による地下鉄サリン事件を目の当たりにして、彼らの「他者感覚」のなさを戦争中の日本のそれに重ね合わせた。「他者を他在において理解する」という一節をいかに解釈するにせよ、オウムのような閉鎖的で、独善的な集団意識に対して、こうした表現を用いることには意味がある。その閉鎖性が強ければ強いほど、そして独

善性が強ければ強いほど、この意味も大きくなる。

しかし、今日の状況は丸山が対決したそれとは少し異なってきたようにみえる。政治的に対立する他者のいずれにも理解を示し、それらのいずれかを一定の正義によって裁いたり、批判したりすることを控えようとする態度は、ある意味では高度な「他者感覚」なくしては出てこない。

いわゆる「コミュ障」は社会性の欠如や対人コミュニケーションのスキルの低いことと同じではない。他者との関係性のあり方に敏感であるがゆえに、うまく「空気」が読めないでいる自分が他者からどのように見られているかを意識して、その結果として一層ぎこちなくなるのが「コミュ障」である。自分が行っているコミュニケーションをメタ次元で観察し、他者との関係性を反省するという視点がなければ、人は「コミュ障」に苦しんだりほしくない。もちろん、これは本当の「他者感覚」ではないという言い方はできる。しかし、少なくともこうした感性は「他者感覚」の欠如と同じではない。

目の前の他者を否定せずに、なるべく受け容れること。「あれか、これか」という二項対立図式ではなく、「あれも、これも」承認すること。これは「他者を他在において理解する」ことの一つの現象形態である。

SNSと歴史修正主義

自分とは考え方や感性が異なる他者を受け容れようとする態度は、さまざまなマイノリティーへの寛容な態度に結びつく。たとえばLGBTへの寛容の度合いは、若い世代ほど確実に高い。

ただ、同じ思考はオーソドックスではない歴史認識への「理解」にもつながってしまう(野口 2020)。『日経新聞』の特集記事によると、「戦後75年を過ぎ、過去の戦争や悲劇の歴史について、若者が簡単に肯定的な姿勢を示すケースが目立っている。真偽不明のSNS(交流サイト)の投稿に大量の「いいね」が付いたり、戦争は「仕方ないこと」と捉えたり」(日本経済新聞 2020)することが多くなったという。

「他者を他在において理解」しようとする、メインストリームの歴史認識では無視されるか否定されるかする「事実」に対しても寛大な態度をとることになる。こうして独裁者にもいい面があったとか、知られていない「美談」とかが拾い上げられてくる。

もちろん、かつて西ドイツの「歴史家論争」で問われたように、尋常でない被害を生み出した犯罪行為を相対化し、いつでもどこの国でも存在した不幸な出来事の一つとして「些細」なものに転換することの問題は深刻である。したがって、こうした歴史修正主義的な言説には、専門の歴史家や教育者から厳しい批判がなされることが多い。しかし批判が厳しい口調になると、他者性のない「偏狭さ」の現れとして、かえって忌避の対象になる。「リベラルな奴ほど非寛容で、「内ゲバ」体質だ」というような言説は、「政治的に中立でいたい」と思う人にほど、一層受け容れられやすい。こうしてまったく悪意がない仕方で、「教科書では取り上げられない真実」が流通してしまう。

マックス・ウェーバーであれば、そうした諸々の見方を「無矛盾」な仕方で制御しようとする。さまざまな対立するものの見方が存在することは認めつつも、彼はそれでも主体として「内的一貫性」を確保しようとした。学問という仕事（ベルーフ）がそれを学ぶ者に提供できるものは、結局は「明晰」さであると彼がいうとき、ある特定の価値に矛盾することなく、一貫してコミットすることが想定されている（Weber 1992: 104 = 2018: 75）（野口 2018b: 78）。これは丸山においても同じである。彼が求めたのは、他者感覚を有すると同時に、「強靱な自己制御力を具した主体」（丸山 1961: 66）であった³。

しかし、「他者を他在において理解する」ことは、こうした「一貫性」とは必ずしも同期しない。それぞれ異なる他者を受け容れようとするれば、自己の一貫性を保つことは難しくなる。さまざまな人を否定しないで受け容れようとするれば、そしてさまざまな人のさまざまな側面に理解を示せば、自己はその分だけ断片化する。SNSで巡り合ったさまざまな断片的なつぶやきに「いいね」を押すとき、「一貫性」が問われることはない。粗雑で偏狭な歴史認識が、他者性

に対して寛容でありたいと思う主体によって受け容れられ、広められていく。

「政治的中立性」の政治性

政治家をしている友人が教えてくれたことがある。選挙のときに、対抗する政党や候補との「敵対」を煽った方が、上の世代の支持者の受けはよい。彼らは対立でテンションを上げる。これに対してそうした話法では、若い支持者は引いていってしまうという。対立図式のなかで「闘う」ことに彼らは強い抵抗感を持つからだ。このためこの友人は世代によって、トークの仕方を変えるらしい。

この話は冒頭の「政治的に中立でいたい」という学生の発言にも呼応する。考えてみれば、運動会で組体操や棒たおしがなくなり、テストの順位が発表されなくなり、競争よりも「個性」や「多様性」がいわれるようになり、「対立」の契機が社会から丁寧に取り除かれつつある。そうした時代の「精神」については、小説家の朝井リョウが『死にがいを求めて生きているの』で扱っている。この世代の若者にとっては、対立を煽って元気になっていく年配者は「何もないところに無理やり対立を生んで、やっつ、自分の存在を感じられる子」（朝井 2019: 446）という残念な存在に映るかもしれない。

対立を回避し、政治的に中立でありたいという気持ちはよく理解できる。しかし、対立を回避し、政治的に中立であろうとすることは、すでに政治的である。「あいちトリエンナーレ」の展示をめぐる論争のなかで、いくつかの作品の「政治的中立性」が問題にされ、税金が投入されている催しでは、政治色はあってはならないとの主張がなされた。日本学術会議のあり方についても、「公務員」なんだから「政治的中立性」を守れという議論がなされている。行政が関わり、税金が使われるすべての事業が「政治的中立性」の原則からの逸脱を指摘される可能性があるし、今後そのようになる可能性は低くない。しかし中立であることの中身を中立的に定めることは簡単ではない（野口 2021）。「あいトリ」の展示は「政治的中立性」の原則に反するが、国立大学などの教

育機関に中曽根元首相の葬儀に際して弔意を示すことを求めるのは「政治的中立性」に反しないというとき、その判定基準はあまりに恣意的である。そして恣意的な空間はいつでも、決定権を持つ側の人のために存在する。

対立を避け、政治的な党派性を回避し、なるべく「政治的に中立でいたい」という気持ちは、「政治的中立性」という殺し文句を用いたパワー・ゲームに巻き込まれ、一方の都合がよいように使われる。そこで中立にとどまろうとすればするほど、それは政治的に中立ではない意味を持ってしまう。他者を尊重し、他者を傷つけないようにしたいという気持ちが政治的に濫用される。

カール・シュミットは1929年に「中立化と脱政治化の時代」という文章を書き、まさにこのことを問題にしている⁴。彼の理解によれば、16世紀の宗教戦争を経験することで、ヨーロッパ人は「闘争が終熄し、相互の理解・合意・説得が可能な中立領域」(Schmitt 1963: 88 = 2007: 210) を求めるようになった。そしてこうして始まった中立化は20世紀になり、技術にこそ完全な中立性の基盤があるという技術信仰に至った。しかし、「[科学]技術はすべての人に仕えるというまさにそれゆえに、中立的ではない」とシュミットは強調する(Schmitt 1963: 90 = 2007: 211)。一般に、学術研究は政治とは切り離されるべきだといわれる。粗野な政治介入はもちろん拒否されるべきであろう。それでも、政治から切り離された学術研究が「中立的」ということもありえない。シュミットの『政治的なものの概念』が出版された1932年は、ハクスリーの『すばらしい新世界』が刊行された年でもある。科学技術が争いを克服した世界のユートピアでは、「政治的なもの」が否定された政治の世界が展開される。

中立性の純度を高めようとするほど、より深刻に「政治的なもの」、つまり友と敵の党派性に直面せざるをえなくなる。このときシュミットが論じたのは、まさに「政治的に中立でいたい」時代における「政治的なもの」の回帰という問題であった⁵。

「政治的に中立でいたい」としても、それどころか「政治的に中立でいたい」と思えば思うほど、「政

治的なもの」は付きまってくる。■

《注》

- 1 「現代における人間と政治」(1961年)でも、Ex Captivitate Salus から何箇所かの引用がなされている。丸山はこの書名を「囚われからの救い」と訳している(丸山 1996a: 23)。おそらく『自己内対話』での引用は、この論文の執筆中のメモだと思われる。
- 2 丸山が引用した『獄中記』には「かつて私〔シュミット〕はマンハイムと幾度も有益な対話をしたことがある」(Schmitt 2010a: 23 = 2017: 140)と書かれている。しかし、1931年5月14日付のシュミットの日記におけるマンハイムについての記述は、引用するのも憚られるほどひどい(Schmitt 2010b: 109)。それに2人の政治理解は、どう考えても大きく食い違っていた。マンハイムの「知識社会学」は「存在被拘束性(Seinsverbundenheit)を絶対化」するのではなく、むしろそれを解きほぐし、「絶対的だと思われているある視野に視野のインデックスを付け加えることで、視野のパティキュラリズムを中立化(neutralisieren)する」(Mannheim 1978: 259 = 1973: 193) 試みだった。シュミットは献本された「知識社会学」をよく読んだうえで、その封筒の表紙に「政治的なものの概念がない(Begriff des Politischen fehlt!)」(Nachlass Carl Schmitt RW 265-27145)と二重線付きで記している(Mehrling 2017: 124)。こうした思想的な対立と、シュミットの自己弁護も含めた戦中と戦後の間の変化について、丸山がどのように考えていたのかはわからない。
- 3 「自己内」での「弁証法」的なダイナミズムを求める点で、丸山は「ヘーゲル」的であった。彼は次のように述べている。「自己内対話は、自分のきらいなものを自分の精神のなかに位置づけ、あたかもそれがすぎであるかのような自分を想定し、その立場に立って自然的自我と対話することである。他在において認識するとはそういうことだ」(丸山 1998: 252)。
- 4 したがって「中立化と脱政治化」の問題は日本の「若者論」に矮小化されてはならない。
- 5 マルクューゼは亡命中にアメリカの「戦略情報局」(OSS、CIAの前身)の同僚だったキルヒハイマーやノイマンを通じて、シュミットの議論から多くを学んでいる。彼は次のように書いている。「寛容が主として抑圧的な社会の保護と保存に奉仕するとき、寛容が対抗運動を中立化(neutralize)し、よりよい他の生活の形式に対して人を無関心にするに奉仕するとき、そのとき寛容は転倒してしまっている」(Marcuse 1965: 111 = 1968: 143)。ここでの「寛容」は「政治的中立性」と置き換えても意味が通る。

《参考文献》

- 朝井リョウ (2019) 『死にがいを求めて生きているの』 中央公論新社。
- NHK おはよう日本 (2020) 「コロナ禍で… 意識に変化? 日本の若者×政治」 2020年10月29日、<https://www.nhk.or.jp/ohayou/digest/2020/10/1029.html> (2020年12月12日閲覧)。
- 小尾俊人 (2019) 『小尾俊人日誌 1965-1985』 中央公論新社。
- 清水靖久 (2019) 『丸山真男と戦後民主主義』 北海道出版会。
- 日本経済新聞 (2020) 「SNSで揺らぐ平和意識 戦争容認、簡単に「いいね」」 2020年10月24日夕刊。
- 野口雅弘 (2018a) 「「コミュ力重視」の若者世代はこうして「野党ざらい」になっていく「批判」や「対立」への強い不快感」『現代ビジネス』 2018年7月13日、<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/56509> (2020年12月12日閲覧)。
- (2018b) 『忖度と官僚制の政治学』 青土社、2018年。
- (2020) 「他者尊重「保守化」の背景にも」〔特集「若者の7年8カ月」へのコメント〕『朝日新聞』 2020年9月17日朝刊。
- (2021) 「「政治的中立性」の陥穽—危機の時代の政治教育」『月刊 Journalism』 2021年1月号(予定)。
- 丸山真男 (1961) 『日本の思想』 岩波新書。
- (1996a) 「現代における人間と政治」『丸山真男集』 第9巻、岩波書店、11-44頁。
- (1996b) 「日本思想史における「古層」の問題」『丸山真男集』 第11巻、岩波書店、123-225頁。
- (1998) 『自己内対話』 みすず書房。
- Mannheim, Karl (1978) Wissenssoziologie, in: *Ideologie und Utopie*, 6. Aufl., Frankfurt am Main: Verlag G. Schulte-Bulmke, S. 227-267 (= (1973) 秋元律郎・田中清助訳『知識社会学』 青木書店、151-204頁)。
- Marcuse, Herbert (1965) Repressive Tolerance, in: Robert Paul Wolff, Barrington Moore, Jr. and Marcuse, *A Critique of Pure Tolerance*, Boston: Beacon Press, pp. 81-117 (= (1968) 大沢真一郎訳「抑圧的寛容」『純粹寛容批判』 せりか書房、109-151頁)。
- Mehring, Reinhard (2017) *Carl Schmitt: Denker im Widerstreit. Werk – Wirkung – Aktualität*, Freiburg u. München: Alber.
- Schmitt, Carl (1963) Der Zeitalter der Neutralisierungen und Entpolitisierungen, in: *Der Begriff des Politischen*, 2. Aufl., Berlin: Duncker & Humblot, S. 79-96 (= (2007) 長尾龍一訳「中立化と脱政治化の時代」『カール・シュミット著作集』 I、慈学社、201-215頁)。
- (2010a) *Ex Captivitate Salus*, 3. Aufl., Berlin: Duncker & Humblot (= (2007) 長尾龍一訳「獄中記」『カール・シュミット著作集』 II、慈学社出版、131-183頁)。
- (2010b) *Tagebücher 1930 bis 1934*, Berlin: Akademie Verlag.
- Weber, Max (1992) *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 17. Wissenschaft als Beruf 1917/1919 - Politik als Beruf 1919*, Tübingen: Paul Siebeck (= (2018) 野口雅弘訳『仕事としての学問 仕事としての政治』 講談社学術文庫)。

